

# 愛情と信頼を基盤とした 持続可能な相互扶助コミュニティの形成

成田 こうじ<sup>†1</sup>

2024年9月8日

行政書士事務所みまもり

本研究は、愛情と信頼を基盤とした持続可能な相互扶助コミュニティの形成が、次世代の社会福祉にどのように繋がるかを探求する。現代において、個々が孤立しやすい社会環境の中で、安心して助けを求め、自然に他者をサポートしたくなるような関係性の構築が課題となっている。本研究では、心理的および物理的な安全性が確保された環境が、メンバー間の信頼とリスペクトを育む要素であり、こうした環境が相互扶助を促進し、持続可能な社会福祉システムに繋がる可能性を提案する。

従来の福祉制度に過度に依存しない、新たな相互扶助の形を示すことで、次世代の社会福祉システムの一翼を担うコミュニティの条件を明確にすることが本研究の目的である。

## 1. 序論

現代社会において、個人が孤立しやすく、助けを求めたり、他者を支援したりする関係性が希薄化している。一方で、従来の社会福祉制度は、制度的な支援に依存する傾向が強く、持続可能な形での支援が難しくなっている。本研究では、愛情と信頼を基盤とし、心理的および物理的安全性が確保されたコミュニティが、次世代の社会福祉システムに貢献する可能性について考察する。

メンバー間の信頼と相互扶助を自然に促進するコミュニティの形成は、従来の福祉制度に代わる新たなアプローチとなり得る。本章では、この問題意識を出発点に、研究の目的や意義を明らかにしていく。

### 1-1. 問題提起

現代社会において、人々はますます個別化され、孤立を深める傾向が見られる。技術の進展や社会構造の変化に伴い、かつて強固であった地域コミュニティや家族関係が希薄化し、支え合いの文化が失われつつある。特に高齢化や経済格差の広がりによって、従来の社会福祉制度だけでは十分な支援が行き届かない状況が生じている。

さらに、個々の社会的孤立が進む中で、心理的な負担を抱える人々が増加し、従来の支援モデルではこれに対応することが難しくなっている。今後、より持続可能な形で、自然な相互扶助が成立するコミュニティを形成すること

が求められている。このような状況下で、愛情と信頼を基盤としたコミュニティの重要性が増している。

### 1-2. 研究の目的

本研究の目的は、愛情と信頼を基盤とした持続可能な相互扶助コミュニティの形成が、次世代の社会福祉システムにどのように貢献できるかを明らかにすることである。従来の福祉制度に依存せず、メンバーが自発的に助けを求め、また他者を支援したくなるようなバランスの取れた関係性を構築することが、持続可能な社会福祉システムの鍵となる。

具体的には、心理的および物理的安全性が確保された環境が、コミュニティ内の信頼とリスペクトを育み、それが自然な相互扶助を促進するかどうかを検証する。本研究を通じて、次世代の社会福祉システムを支える新たなコミュニティのモデルを提示することを目指す。

### 1-3. 本研究の意義と背景

本研究は、愛情と信頼を基盤とした持続可能な相互扶助コミュニティの形成が、次世代の社会福祉システムに寄与する可能性を探るものであり、その意義は大きい。従来の福祉制度は、制度的支援に依存する傾向が強く、限られた資源や財政的制約の中で支援を持続させることが困難になってきている。この状況を踏まえ、より持続的で自然な

<sup>†1</sup> 行政書士事務所みまもり

形で機能する相互扶助の仕組みが求められている。

特に、現代社会においては、個人の孤立化が進む中で、人々が助けを求めたり、他者を支援したりすることが難しくなっている。愛情と信頼を基盤に、心理的および物理的安全性が確保されたコミュニティが形成されれば、メンバー同士の信頼関係が強まり、相互扶助が自然に促進される可能性がある。

本研究は、こうしたコミュニティ形成のモデルを提示し、次世代の社会福祉システムに代わる新たな支援の枠組みを提案するという点で、社会的にも学術的にも大きな意義を持つ。

本章では、現代社会におけるコミュニティの希薄化や、従来の福祉制度が抱える限界に対する問題提起を行った。個人が孤立し、支援を受けることが難しくなっている現状を踏まえ、愛情と信頼を基盤とした相互扶助コミュニティの形成が、次世代の社会福祉システムの一翼を担う可能性について論じた。本研究は、自然な相互扶助が機能するコミュニティを構築することで、従来の福祉制度に過度に依存しない持続可能な支援の枠組みを提案することを目的としている。

## 2. 理論的背景

本章では、愛情と信頼を基盤とした相互扶助コミュニティの形成を理解するための理論的背景について考察する。現代社会において、個人が孤立しやすい環境や、従来の福祉制度が抱える限界を克服するためには、コミュニティの役割や安全性の確保が重要な要素となる。心理的および物理的安全性が、メンバー間の信頼や相互扶助を育むための基盤であることを明らかにし、次世代の社会福祉システムへの貢献を探る。

本章では、コミュニティと社会福祉の役割、心理的および物理的安全性の概念、そして安全な人間関係が相互扶助に与える影響について、既存の理論を整理し、次章で提案する仮説の土台を築く。

### 2-1. コミュニティと社会福祉の役割

コミュニティは、歴史的に見ても、社会福祉の根幹を支える重要な存在である。家族や地域社会は、個人が困難に直面した際に自然な形で支援を提供し、相互扶助の関係を

築いてきた。しかし、近代化や都市化に伴い、こうした伝統的なコミュニティの機能が希薄化し、従来の社会福祉制度に依存する形へと移行している。この結果、支援の一元化や負担の集中が進み、持続可能性に課題が生じている。

社会福祉制度は、政府や自治体が提供する公共サービスを通じて、特に弱者層への支援を行う重要な機能を持つが、リソースの限界や財政負担の問題があるため、すべてのニーズを満たすことは難しい。こうした背景から、従来の福祉制度を補完し、持続可能な社会福祉の実現を目指すために、コミュニティの役割が再評価されている。

愛情と信頼に基づくコミュニティの形成は、メンバー間の自然な相互扶助を促進し、次世代の社会福祉の重要な基盤として機能する可能性がある。心理的および物理的安全性を確保したコミュニティは、個人が安心して助けを求め、また他者を支援する環境を提供することで、持続可能な社会福祉システムの一部としての役割を果たす。

### 2-2. 心理的安全性と物理的安全性の定義

相互扶助コミュニティを成立させるためには、メンバーが心理的および物理的に安全であると感じる環境を整えることが不可欠である。これらの安全性が確保されることで、メンバー間の信頼が深まり、自然な相互扶助の関係が形成されやすくなる。

心理的安全性とは、コミュニティ内で個人が自由に意見や感情を表現できる環境を指す。メンバーは、自分が評価されたり、罰せられたりすることを恐れることなく、安心して他者と関わることができる。このような環境が整うことで、助けを求めやすくなり、他者からのサポートを受け入れる心の余裕が生まれる。心理的安全性が確保されることは、コミュニティ内での活発なコミュニケーションや相互理解の促進に繋がる。

一方、物理的安全性は、メンバーが身体的な危険や威圧を感じることなく、安心してコミュニティに参加できる状態を意味する。物理的安全性が確保された環境では、メンバーは自分の身体が脅かされる心配をせずに活動に集中でき、他者との協力関係を築きやすくなる。暴力やハラスメントなど、身体的な脅威が排除されていることが、物理的安全性の基本条件である。

これらの安全性は、コミュニティ内での信頼関係の形成に不可欠な要素であり、相互扶助を自然に機能させるための土台となる。

### (1) 心理的安全性：信頼と尊重を基盤とする環境

心理的安全性は、コミュニティ内でメンバーが自分の意見や感情を自由に表現できる環境を指し、その基盤には信頼と相互の尊重がある。この安全性が確保されることで、メンバーは批判や否定を恐れることなく、他者とオープンにコミュニケーションを図ることが可能になる。

コミュニティ内での信頼と尊重は、互いの違いを認め、個々の存在価値を尊重する姿勢から生まれる。メンバーが自身の立場や考えを安心して共有できると感じることで、心理的な安心感が高まり、結果として助けを求めるとやサポートを提供することが自然に行われるようになる。このような環境が整うことで、相互扶助の基盤が強化され、コミュニティ全体の結束力も高まる。

また、信頼と尊重がある環境では、個人が孤立せず、他者との連携が促進される。心理的安全性が確立されることで、メンバー同士がより深い信頼関係を築き、困難な状況でも互いに助け合う風土が育まれる。このため、心理的安全性は、相互扶助コミュニティの持続可能性を支える重要な要素である。

### (2) 物理的安全性：身体的安心感が担保される関係性

物理的安全性は、コミュニティ内でメンバーが身体的な危険や脅威を感じることなく、安心して活動に参加できる状態を意味する。この安全性が確保されることで、メンバーは自分の身体的な安心感が担保されていると感じ、他者と積極的に関わりを持つことができる。

物理的安全性を確保するためには、暴力や威圧、ハラスメントなど、メンバーの身体に対する脅威を徹底的に排除する環境が必要である。これにより、メンバーは恐怖や不安に怯えることなく、相互に信頼を深めることができる。身体的な安心感が担保されることで、コミュニティ内での人間関係が円滑に進み、メンバー同士が自由に助け合う環境が整う。

さらに、物理的安全性は、心理的安全性と密接に関連している。身体的に安心できる環境は、心理的な安心感をもたらし、結果としてコミュニティ内での信頼関係の強化につながる。これにより、メンバーは自発的に助け合い、相互扶助の文化が自然に育まれる。物理的安全性の確保は、相互扶助コミュニティの基盤として欠かせない要素である。

## 2-3.安全な人間関係がコミュニティに与える影響

安全な人間関係がコミュニティに与える影響は非常に大きい。心理的および物理的安全性が確保された人間関係では、メンバー間に信頼と尊重が生まれ、相互理解が深まる。こうした環境では、メンバーが安心して助けを求めることができ、また他者をサポートすることに積極的になりやすい。これにより、コミュニティ全体の結束力が高まり、メンバー間の協力関係が強化される。

安全な環境が確保されることで、コミュニティ内のメンバーは互いのニーズや状況をより理解し、自然な形で相互扶助が行われるようになる。恐れや不安がない環境では、メンバーが自主的に助け合う文化が醸成され、他者の困難に共感しやすくなる。この結果、支援が必要なメンバーに対して、コミュニティ全体が積極的に関与し、支え合う風土が育まれる。

さらに、安心感が生まれることで、メンバー間の信頼が深まり、コミュニティ全体の持続可能性が高まる。信頼が育まれるコミュニティでは、助けを求めるとや支援を提供することが日常的な行為として根付き、結果として強固な相互扶助ネットワークが形成される。このような環境が持続されることで、従来の社会福祉制度に依存せずに、自律的に機能するコミュニティが確立される。

## 2-4. 社会的孤立や差別に対するコミュニティの役割

社会的孤立や差別は、現代社会において深刻な課題となっている。経済的格差や高齢化、社会の多様性の中で、個人が孤立したり、差別を受けるリスクが増している。このような状況下で、コミュニティが果たす役割はますます重要となっている。

愛情と信頼を基盤としたコミュニティは、孤立や差別を解消するための有力な手段となり得る。心理的および物理的安全性が確保された環境では、個々のメンバーが安心して自分の存在を認められ、平等に扱われることが期待できる。孤立した人々が、コミュニティに参加することで他者とのつながりを持ち、差別や偏見がない環境で自己を表現する機会が得られる。このような環境は、社会的弱者や少数派の人々にとって、支えとなる役割を果たす。

また、コミュニティは、メンバー間の相互理解を深め、誤解や偏見を解消する場として機能することができる。安全で尊重し合う環境では、異なる背景を持つ人々が互いに理解し合い、協力することが促進される。その結果、社会的孤立や差別が軽減され、すべてのメンバーが平等に貢献

し合うことが可能となる。

さらに、こうしたコミュニティは、従来の社会福祉制度が対応しきれない孤立や差別の問題に対する補完的な役割を果たすことができる。支援を必要とするメンバーに対し、コミュニティ内での自然な相互扶助が行われることで、社会全体の福祉に貢献することが可能となる。

本章では、愛情と信頼を基盤とした相互扶助コミュニティの形成における理論的背景を考察した。心理的および物理的安全性が、メンバー間の信頼関係を構築し、自然な相互扶助を促進するための重要な要素であることを確認した。また、社会的孤立や差別といった現代社会の課題に対して、コミュニティが果たす役割についても検討した。

コミュニティが安全な環境を提供することで、メンバー間の結束が強まり、孤立した個人が支援を受け、差別が軽減される可能性が高まる。こうした環境は、従来の福祉制度を補完し、持続可能な社会福祉システムに貢献するための基盤となる。本章の議論を基に、次章では、愛情と信頼を基盤とした相互扶助コミュニティの具体的な形成方法について仮説を提示する。

### 3. 仮説の提示

本章では、愛情と信頼を基盤とした相互扶助コミュニティの形成に向けた具体的な仮説を提示する。これまでの理論的背景を踏まえ、コミュニティ内で心理的および物理的安全性が確保されることで、メンバー間に信頼関係が築かれ、自然な相互扶助が促進されると考えられる。また、こうしたコミュニティは、従来の福祉制度を補完する新たな形の社会福祉システムとして機能する可能性がある。

本章では、まずコミュニティ内での安全性確保と信頼構築の重要性について議論し、それが相互扶助の文化を育むかどうかを検証する。さらに、従来のコミュニティが抱える課題に対する解決策として、この仮説を提示する。

#### 3-1. 心理的・物理的安全性のあるコミュニティの仮説

愛情と信頼を基盤としたコミュニティにおいて、心理的および物理的安全性が確保されることが、相互扶助を自然に促進するための重要な要素となる。本研究の仮説は、これらの安全性が担保された環境において、メンバーは自由

に助けを求め、他者をサポートする意欲が自然に生じるというものである。

心理的安全性が高いコミュニティでは、メンバーが自分の意見や感情を表現しやすく、他者からの批判や否定を恐れることなく、安心して交流できる。このような環境では、メンバー間の信頼が深まり、相互理解が進むため、助けを求めることやサポートを提供する行動が日常的なものとなる。

物理的安全性もまた、コミュニティの持続可能性を支える重要な要素である。メンバーが身体的な危険や脅威を感じることなく、安心して活動に参加できる環境が整備されていることで、身体的な安心感が確保され、心理的な安定も得られる。これにより、コミュニティ内での支援が円滑に行われ、自然な相互扶助が促進される。

本仮説は、心理的および物理的安全性が確保されたコミュニティ内では、メンバー同士が互いに助け合い、持続的な相互扶助の文化が形成されるという前提に基づいている。このようなコミュニティが、従来の福祉制度を補完し、次世代の社会福祉システムに貢献することが期待される。

#### (1) 加害行為の排除とリスペクトの強調

コミュニティ内で心理的安全性を確保するためには、加害行為の排除とメンバー間のリスペクトが不可欠である。加害行為には、身体的暴力、精神的攻撃、差別、マウンティング行為が含まれ、これらの行為は他者の安心感を脅かし、コミュニティ全体の安全性と信頼を損なう要因となる。このような行為を排除するためには、全メンバーが守るべき基本的なルールを明確に設定し、その順守を求めることが、コミュニティの安定と持続可能性を保つために重要である。

現代社会では、経済的・社会的成功が過度に重視され、成功者が称賛される一方で、そうでない人々が軽視される傾向がある。しかし、成功や失敗は個人の能力だけでなく、環境や運に大きく左右されるものであり、マイケル・サンデルが指摘するように、それを基にして個人を評価することは不公平である。コミュニティでは、成功や地位に依存せず、すべてのメンバーが対等に尊重されるべきであり、このリスペクトの文化がメンバー間の信頼を育み、心理的安全性を確保するための基盤となる。

一方で、犯罪者や加害行為を行う者もまた、社会的な



成功や失敗と同様に、外的環境や運の影響を受けている場合が多い。理論的には、彼らも他のメンバーと同様に平等に扱われるべきである。しかし、加害行為を容認することは他のメンバーの安全を脅かし、コミュニティ全体の存続を危うくする。そのため、加害行為を行う者に対しては、コミュニティのルールを明確に示し、順守できない場合には排除することが現実的かつ必要な対応策である。

このアプローチは、個人を排除すること自体が目的ではなく、コミュニティ全体の安全性と持続可能性を守るための手段である。すべてのメンバーに対し、加害行為を行わないというシンプルで明確なルールが設定され、そのルールを守らない場合には排除される。このルールの順守によって、コミュニティ内でのリスクと信頼が促進され、持続可能な相互扶助の文化が形成される。

## (2) 安全性が担保された人間関係による相互扶助の強化

コミュニティ内での相互扶助を促進するためには、心理的および物理的安全性が確保された人間関係が不可欠である。メンバーが互いに信頼し、リスクを持って接することで、助けを求めると他者をサポートすることが自然に行われるようになる。これにより、支援のやり取りが一方的ではなく、相互的でバランスの取れた形で行われる。

心理的安全性が確保された環境では、メンバーは失敗を恐れることなく助けを求めることができ、他者からのサポートを受け入れることが容易になる。また、物理的安全性が保障されることで、身体的な脅威を感じることなく、安心してコミュニティ活動に参加することができる。このような環境が整うことで、相互扶助の関係が強化され、メンバー同士が積極的に支え合う文化が育まれる。

相互扶助が自然に機能するコミュニティでは、支援を必要とするメンバーが安心して声を上げることができ、また他者を支援する側も、強制されることなく自主的に助けたいという気持ちが生まれる。この相互関係がバランスよく成り立つことで、コミュニティ全体が支え合い、持続可能な形で発展していく。

さらに、この相互扶助の強化は、従来の社会福祉制度に依存することなく、コミュニティ自体が自然な支援のネットワークを形成し、持続可能な福祉システムとして機能することを可能にする。コミュニティメンバーが相互に支援し

合うことで、福祉の担い手が増え、地域社会全体の福祉が強化されるという効果が期待できる。

## 3-2. 既存コミュニティの課題

既存のコミュニティは、それぞれ独自の特徴や利点を持ちながらも、相互扶助や支援のシステムに課題を抱えている。以下では、各コミュニティの特徴や利点を挙げつつ、それに伴う課題を具体例と共に示す。

### (1) 地域社会

地域社会は、特に高齢者にとって日常生活の支援や交流の場として重要な役割を果たす。伝統的な隣人同士の助け合いがある一方で、都市化やライフスタイルの変化に伴い、コミュニティの結びつきが希薄化している。特に高齢者が孤立しやすく、支援を受けることが難しくなっている状況が生まれている。このような社会的孤立は、地域社会が持つ潜在的な助け合いの力を弱め、福祉制度に過度な依存を生む要因となっている。

### (2) ビジネスオンラインサロン

ビジネスオンラインサロンは、共通の目標や知識を共有し、メンバーの自己成長を促す場として機能する。特に意欲の高いメンバーにとっては有益な学びと成長の機会を提供している。しかし、成功や成果が強調される傾向があり、内部での結束が強まる反面、外部の人々や経済的社会的成功を重視しない考え方を持つ人々との分断が生じる懸念がある。また、ビジネスオンラインサロンには資本主義的な価値観が強く、相互扶助の思想と必ずしも一致しない場合があるため、コミュニティ内での助け合いや社会全体への還元が難しくなることもある。

### (3) 宗教団体

宗教団体は、共通の信念や価値観を基盤とした強固な結束力を持ち、メンバー同士が深い信頼関係を築く場として機能する。信者間の助け合いやサポートが自然に行われ、精神的な支えとなることが多い。しかし、その強い結束力は、異なる信条や価値観を持つ人々に対して排他的な傾向を生むことがある。これにより、外部からの参加が困難になり、多様性が損なわれる可能性がある。また、宗教的な信念に依存するため、信仰を共有しない人々との協力や相互扶助の関係が築かれにくいという課題もある。

#### (4) 学校

学校は、共通の教育目標を持つ者が集まり、倫理観や規律が共有される場として機能し、同世代の生徒が互いに影響を与え合うことで成長する貴重な機会を提供している。しかし、集団内での力関係や異質な存在に対する不寛容さがあるため、いじめや差別が発生することがある。生徒同士が優劣を競い合う中で、弱い立場にある生徒が排除されることがあり、また、社会的・文化的な背景の違いが偏見や差別の原因となることがある。

さらに、学校におけるいじめや差別に対しては、司法等の公的機関の介入が限定的な文化があり、問題が内々で解決される傾向が強いため、十分な対策が講じられない場合も少なくない。このような環境では、支援を求めることが難しく、相互に助け合う文化が成立しにくい。

#### (5) 家族

家族は、最も身近で強固なコミュニティの一つであり、愛情と信頼を基盤に相互扶助が自然に行われる場として機能している。家族内では、メンバーが互いに支え合い、困難な状況においても協力が促進されやすい。しかし、家族というコミュニティはその規模が限られており、外部に対して開かれていないため、支援の範囲が狭くなる傾向がある。また、必ずしもすべての家族が良好な関係を保っているわけではなく、家族間の関係が崩れることで、支援が途絶える場合もある。

さらに、家族は血縁や婚姻によって形成されるため、外部の人々が加入することが難しく、排他的なコミュニティになりやすい。家族内での助け合いは密接であるものの、その支援の限界や内部での葛藤が課題となり得る。提案するコミュニティモデルでは、家族のような支え合いの強さを持ちながらも、血縁に依存せず、広範なメンバーを受け入れ、持続的に助け合う仕組みを構築することを目指している。

#### (6) 趣味のコミュニティ

趣味のコミュニティは、共通の興味や関心を持つメンバーが集まり、リラックスした雰囲気の中で交流できる場を提供する。こうしたコミュニティでは、趣味や関心を共有することで強固な絆が生まれ、特に気軽に助け合うことが可能である。しかし、共通の趣味を持たない人々にとっては参

加が難しく、また、メンバーが趣味や関心を変えた場合、コミュニティから離脱することが多い。これにより、持続的な相互扶助の場としては不安定になりやすく、長期的な支援の関係を築くのが難しいという課題がある。

#### (7) オンラインゲームコミュニティ

オンラインゲームコミュニティは、特定のゲームを通じてメンバーがつながり、協力プレイやチームワークを通じて信頼関係を築く場である。ゲーム内での協力は、リアルタイムでの意思疎通や戦略の共有を必要とし、自然な相互扶助が生まれやすい。一方、匿名性の高さからマナーや倫理的な問題が発生することもあり、コミュニティ全体が秩序を保つのが難しくなる場合もある。また、ゲーム外での交流が少なく、外部との接触が制限されるため、閉鎖的な性質が強くなる傾向がある。

#### (8) 職場コミュニティ

職場コミュニティは、共通の目標や業務を通じてメンバーがつながり、協力して成果を上げる場である。仕事を通じた協力や成果の共有により、メンバー間の信頼関係が強化され、職場内での相互扶助が自然に生まれることがある。しかし、業務上の競争や昇進に伴う評価の影響により、個々の成功が優先される場合があり、支援を求めることが難しくなる。また、上下関係や業績評価が強調される職場環境では、助け合う文化よりも個人の成果が重視されるため、相互扶助の精神が育ちにくいという課題も存在する。

本章では、心理的および物理的安全性が確保されたコミュニティにおける相互扶助の重要性を仮説として提示し、既存のさまざまなコミュニティの課題について考察した。地域社会、ビジネスオンラインサロン、宗教団体、学校、趣味のコミュニティ、オンラインゲームコミュニティ、職場コミュニティそれぞれにおいて、強固な信頼関係や助け合いが形成される利点がある一方で、外部との分断や排他性、競争による分断、支援を求めることが難しい環境が存在している。

これらのコミュニティでは、それぞれ独自の課題を抱えており、相互扶助の機能が十分に発揮されないことが多い。次章では、こうした課題を克服するために、心理的および物理的安全性を基盤とした新しいコミュニティの設計を具体的に検討する。

## 4. 方法論と仮想シナリオ

本章では、心理的および物理的安全性を基盤とした相互扶助コミュニティの具体的な構築方法について述べる。前章で取り上げた既存のコミュニティが抱える課題を解決するための方法論を提示し、コミュニティ内外において持続可能な支援システムを構築するための戦略を探る。特に、メンバー間の結束力を高めるための目標設定や、加害行為を排除する理念を軸にした新たなコミュニティモデルについて検討する。

また、これらの方法論を実際に適用する場面を想定し、仮想シナリオを通じてコミュニティの形成と維持における具体的な対応策を示す。仮想シナリオでは、加害行為に対してどのように断固とした対応を行うか、そして外部との分断を避けながらコミュニティの持続的な発展を目指すかについて具体例を挙げながら検討していく。

### 4-1. 心理的・物理的安全性を実現するためのルール設定

心理的および物理的安全性を実現するための最も重要なステップは、基本的な2つのルールを確立することにある。この2つがしっかりと守られることで、他の要素も自然に促進され、コミュニティ全体の安全性と信頼関係が深まる。

#### (1) 加害行為の排除

まず、身体的・精神的な暴力、ハラスメント、差別、言葉による攻撃などの加害行為を一切許容しないという明確なルールを設定する。加害行為が存在しないことで、メンバーは安心して活動に参加でき、心理的安全性が高まる。また、加害行為が確認された場合には、具体的な対応策を迅速に講じ、コミュニティ全体でそのルールを守る意識を共有することが重要である。

#### (2) リスペクトと平等性の強調

すべてのメンバーが対等に尊重され、経済的・社会的な成功や地位によって評価されないというルールを強調する。存在そのものをリスペクトする文化が形成されることで、メンバーは自由に意見を交換しやすくなり、信頼関係が深まる。これにより、コミュニティ内での相互扶助や協力が自然と促進され、持続可能な支援関係が築かれる。

これら2つの基本的なルールがしっかりと守られることで、以下の要素が自然に促進される。

- **オープンなコミュニケーションの促進**

加害行為が排除され、メンバー同士が平等に尊重される環境が整えば、メンバーは自由に意見を表明し、他者と対話することが容易になる。オープンなコミュニケーションが促進され、助け合いや意見交換が活発に行われるようになる。

- **物理的安全性の確保**

心理的安全性が確保された環境では、メンバーが安心して活動できるよう、物理的な安全性も自ずと重視されるようになる。コミュニティの活動場所や施設が、メンバーにとって安全かつ快適な場所として整備されることが期待される。

### 4-2. 仮想シナリオの提示

本節では、心理的および物理的安全性を基盤としたルールを設定したコミュニティが、どのように持続可能な形で機能し、相互扶助が自然に発生するかを具体的な仮想シナリオを通じて示す。これにより、設定されたルールがどのように実際の場面で適用され、メンバー間の信頼関係や助け合いが促進されるかを可視化する。

#### (1) シナリオ1: 新規メンバーの加入と信頼構築

あるコミュニティに新規メンバーが加入した。新規メンバーは最初、不安を抱えながら参加するが、既存のメンバーがルールに基づきリスペクトを持って迎え入れる。加害行為が一切許容されないという明確なルールのもと、新メンバーは安心して自己紹介を行い、意見を共有できる環境が整っている。このようにして、新メンバーがすぐにコミュニティに馴染み、他のメンバーからの信頼を得ていく。

#### (2) シナリオ2: 加害行為が発生した場合の対応

あるメンバーが他のメンバーに対して精神的な攻撃を行ったケース。コミュニティのリーダーは、ルールに従い加害行為に対して迅速に対応する。まず、加害者に対して注意を促し、コミュニティ内での振る舞いについて再確認を求める。もしも再度同様の行為が発生した場合には、加害者を一時的にコミュニティから除外することも検討される。これにより、他のメンバーは安心して活動を続けら

れる環境が維持され、心理的安全性が確保される。

### (3) シナリオ 3: 外部との協力を通じた相互扶助の強化

コミュニティは外部団体との協力を図り、他のコミュニティとの連携を通じて、相互扶助のネットワークを広げることを目指している。リスペクトと平等性を基盤にした関係性が、コミュニティ内だけでなく外部との関係においても重要な役割を果たし、分断を生むことなく協力体制が築かれていく。これにより、より大規模な支援が可能になり、コミュニティのメンバーも安心して外部のリソースを活用することができる。

本章では、心理的および物理的安全性を基盤としたコミュニティの構築方法を提案し、具体的なルール設定と仮想シナリオを通じてその実現方法を示した。加害行為の排除とリスペクトの強調という 2 つの基本的なルールを確立することで、他の要素、特にオープンなコミュニケーションや物理的な安全性も自然に促進されることが明らかになった。これにより、メンバー間の信頼関係が深まり、持続可能な相互扶助が実現されることが期待できる。

さらに、仮想シナリオでは、新規メンバーの加入や加害行為への対応、外部との協力を通じたコミュニティの拡大と相互扶助の強化について具体的な例を示した。これにより、コミュニティ内でのルールがどのように実際に機能し、持続可能な支援システムが構築されるかが具体的に理解できた。次章では、これらの実践的手法の評価や効果を検討し、今後のコミュニティ形成における課題を考察する。

## 5. 先行研究との比較と議論

本章では、本研究で提案したコミュニティ形成の方法論を、これまでの先行研究と比較し、その独自性や有効性について議論する。従来のコミュニティ研究や相互扶助に関するアプローチでは、主に経済的な目標や地位の向上を目的とした集団が多く、心理的安全性や物理的安全性に基づく持続可能なコミュニティの構築が十分に考慮されていない場合が多い。

本研究では、加害行為の排除とリスペクトの強調という基本的なルールを設けることで、従来のアプローチとは異なる形でメンバー間の信頼関係や相互扶助の仕組みを強化

することを目指している。先行研究と比較し、心理的・物理的安全性の確保がコミュニティ内の活発な交流や支援を自然に促進する点で、本研究の方法論の意義を明確にし、その実用性を検証する。

### 5-1. 心理的・物理的安全性を重視した先行研究との比較

心理的および物理的安全性に焦点を当てた先行研究は、主に職場環境や教育機関における信頼関係の構築をテーマに取り扱ってきた。たとえば、心理的安全性の概念は、エイミー・エドモンドソンによる職場におけるチームの生産性向上に関する研究において注目されている (Edmondson, 1999)。エドモンドソンの研究では、チームメンバーが互いに安心して意見を出し合い、失敗を恐れずにチャレンジできる環境が、生産性や創造性を高める要因として重要視されている。

一方、物理的安全性に関する研究は主に公共の場や教育機関における設計やセキュリティ対策に焦点を当てており、安全な物理的環境が人々の心理的な安定感に与える影響を強調している。特に、防犯対策や犯罪予防を通じて、物理的な安全性がいかに関心感を高め、コミュニティ内での信頼関係を深めるかが議論されている (Newman, 1972)。

本研究は、これらの先行研究の成果を踏まえつつ、コミュニティ全体における心理的・物理的安全性の確保が、相互扶助の促進にどのように貢献するかを新たな視点から提案している。従来の研究が職場や教育現場など特定の環境に限定されているのに対し、本研究では、一般的なコミュニティ全体を対象とし、心理的・物理的安全性を包括的に重視するアプローチを取っている点で独自性がある。また、加害行為の排除とリスペクトの強調を基盤にしたルール設定が、メンバー間の信頼と協力を自然に促進するという新しい視点を提供している。

### 5-2. 提案手法の独自性と適用可能性

本研究で提案したコミュニティ形成の手法は、従来の研究と比較していくつかの点で独自性を持っている。まず、心理的および物理的安全性を同時に重視し、相互扶助を促進するためにルール設定を基盤としたアプローチは、特定の環境（職場や教育機関）だけでなく、一般的なコミュニティ全体に適用できる点で新しいものである。従来の研究では、心理的安全性が主に職場やチーム内でのパフォーマンス



ンス向上の手段として扱われていたが、本研究はコミュニティ全体での相互扶助や持続的な支援システムの確立に重点を置いている。

さらに、本提案手法は加害行為の排除とリスクの強調を基盤とし、これがコミュニティ全体における信頼関係の構築とメンバー間の協力を促進するための中心的な要素である。この点で、従来のルールや制度が単に規制的な役割を果たすだけでなく、コミュニティメンバーの自発的な参加と協力を促す仕組みとして機能する。

### 適用可能性

本手法は、さまざまなタイプのコミュニティに適用可能である。地域社会、学校、職場、ビジネスオンラインサロン、趣味のコミュニティなど、それぞれの性質や目的に応じて柔軟に適応できる特徴を持つ。たとえば、地域社会においては、高齢者の孤立を防ぐための相互扶助ネットワークの形成に、また学校や職場では、いじめや差別の排除と健全なコミュニケーションを育む環境づくりに応用できる。

さらに、この手法はオンラインコミュニティにも適用可能であり、匿名性が高いオンライン環境においてもリスクと安全性を確保し、協力的な関係を構築するために役立つ。また、外部との分断を防ぐためのルール設定や対応策も、閉鎖的なコミュニティにならないための手段として機能する。

これにより、本提案手法は、さまざまな場面や状況に適応し、持続可能なコミュニティ形成に貢献できると考えられる。

本章では、本研究で提案したコミュニティ形成の方法論を先行研究と比較し、その独自性と適用可能性について議論した。心理的および物理的安全性を同時に重視するアプローチは、従来の研究が特定の環境に限定されがちであったのに対し、一般的なコミュニティ全体に適用可能である点で新しい視点を提供している。また、加害行為の排除とリスクの強調を基盤としたルール設定が、コミュニティ内の信頼関係を自然に促進し、相互扶助の文化を育む要素であることを明らかにした。

さらに、この手法は地域社会、学校、職場、オンラインコミュニティなど、さまざまなタイプのコミュニティに適用できる柔軟性を持ち、持続可能な支援関係の形成に寄与する可能性が高いことが示された。これにより、従来のコ

ミュニティ運営における課題を解決する新たな手段としての有効性が確認された。

## 6. 今後の検証と課題

本章では、本研究で提案したコミュニティ形成の方法論に対する今後の検証と、残されている課題について議論する。提案された手法は、心理的および物理的安全性を基盤とした持続可能な相互扶助のコミュニティ構築を目指しているが、実際のコミュニティでの実践を通じた検証が必要である。特に、異なるタイプのコミュニティにおいて、この手法がどの程度適応可能であり、どのような効果をもたらすかを観察し、実証することが求められる。

また、本研究で提示したルール設定や相互扶助の促進が、コミュニティ内外でどのような影響を与えるか、特に長期的な視点での効果を見極める必要がある。これにより、コミュニティの持続性やメンバー間の信頼関係の深化に対するさらなる課題や改善点を明らかにし、今後の発展につなげていくことが求められる。

### 6-1. 実証研究の必要性

提案されたコミュニティ形成の手法が理論的には有効であると考えられる一方で、その効果を確認し、適用の有効性を実証するためには、実際のコミュニティにおける実証研究が不可欠である。異なる規模や目的を持つコミュニティにおいて、心理的および物理的安全性の確保がどのように相互扶助を促進するか、具体的なデータや事例を通じて検証する必要がある。

特に、提案されたルール設定が、さまざまな状況下でメンバー間の信頼関係の構築に寄与するか、また、加害行為の排除とリスクの強調がどの程度コミュニティの結束力を高めるかを観察することが重要である。これにより、提案された手法が持続可能な支援システムの構築にどのように貢献するかが明らかになり、さらなる改善や最適化のための具体的な知見が得られる。

さらに、異なる文化的背景や社会的環境における適応性についても検討する必要がある。文化や社会の違いが心理的・物理的安全性に対する認識に影響を与える可能性があるため、多様な環境での実証研究が、手法の普遍性と適応性を確認するために不可欠である。

## 6-2. 心理的・物理的安全性の測定方法

心理的および物理的安全性がコミュニティ内でどの程度実現されているかを評価するためには、適切な測定方法を確立することが必要である。特に、メンバー間の信頼関係や相互扶助の度合いを客観的に把握するためには、定性的および定量的なアプローチを組み合わせた多角的な測定が求められる。

### (1) 心理的安全性の測定

心理的安全性の測定には、主にアンケート調査やインタビューが有効である。エドモンドソンによる心理的安全性の評価指標を活用し、メンバーが自由に意見を述べられると感じているか、他のメンバーから尊重されているかといった項目を含むアンケートを実施する。また、インタビューを通じて、メンバーが感じている安全性の質的なデータも収集し、コミュニティ内での心理的安全性がどの程度保たれているかを評価する。

### (2) 物理的安全性の測定

物理的安全性については、環境の整備状況やリスク管理の体制を評価するための観察や、メンバーが身体的な安心感を感じているかを確認するためのアンケート調査を活用する。施設や活動場所の安全基準が守られているか、適切なセキュリティ対策が取られているかといった項目をチェックリスト形式で評価し、物理的に安心して活動できる環境が提供されているかを検証する。

### (3) コミュニティ全体の信頼と相互扶助の評価

心理的・物理的安全性が確保された環境が、コミュニティ内の信頼関係や相互扶助にどのように影響しているかを把握するために、定期的なアンケート調査や観察を行う。メンバーがどの程度他者に支援を求めやすいと感じているか、また、どの程度他者を支援したいと思っているかを評価する項目を設定し、相互扶助の文化がどのように育まれているかを測定する。

これらの測定方法を組み合わせることで、心理的および物理的安全性がコミュニティの持続可能性や信頼関係の強化にどのように寄与しているかを定量的かつ定性的に評価することが可能となる。

本章では、提案手法の実証研究の必要性と、心理的および物理的安全性を測定するための方法について検討した。提案されたコミュニティ形成のアプローチが理論的には有効である一方で、実際のコミュニティにおける効果を確認するためには、現場での実証研究が不可欠である。特に、異なる文化や社会的背景において、提案手法がどのように機能するかを検証することが重要である。

また、心理的および物理的安全性を定量的および定性的に評価するための具体的な測定方法についても述べた。これらの測定方法を用いることで、コミュニティ内での信頼関係や相互扶助がどの程度促進されているかを把握し、今後の改善や最適化に向けたデータを収集することが可能となる。今後の研究において、これらの測定方法を活用し、提案手法の効果を詳細に検証していくことが求められる。

## 7. 結論

本研究では、心理的および物理的安全性を基盤とした持続可能な相互扶助コミュニティの形成方法を提案し、その有効性と適用可能性を検討してきた。従来のコミュニティ形成における課題を克服するために、加害行為の排除とリスクの強調を基本ルールとして設定し、これがメンバー間の信頼関係を強化し、相互扶助を自然に促進する要素となることを示した。さらに、仮想シナリオを通じて、コミュニティ内外での持続可能な協力関係の構築を具体的に検証した。

本章では、これまでの議論を総括し、提案手法の意義と今後の課題についてまとめる。また、今後の実証研究を通じて、提案されたアプローチがどのように社会全体で適用され、発展していく可能性があるかを展望する。

### 7-1. 実証研究の必要性

本研究では、現代社会において孤立しがちな個人を支え、持続可能な相互扶助のコミュニティを形成するための具体的な手法を提案した。特に、心理的および物理的安全性を確保することが、メンバー間の信頼関係を構築し、コミュニティの中で自然な助け合いが生まれるための重要な要素であることを明らかにした。

加害行為の排除とリスクの強調という基本的なルール設定が、心理的安全性を高め、結果としてオープンなコミュニケーションや相互扶助を促進するという流れを

示し、具体的な仮想シナリオを通じて、その実践的な効果を検証した。さらに、コミュニティの持続可能性を高めるために、外部との協力関係を築き、分断を避ける手法についても考察した。

これらの成果を通じて、提案手法が従来のコミュニティ形成のアプローチとは異なり、心理的および物理的安全性を基盤とすることで、より強固で持続可能なコミュニティを構築するための新しい視点を提供した。今後、実証研究を進めることで、提案手法の有効性をさらに確かめ、異なる社会的・文化的背景における適用可能性についても検討することが必要である。

## 7-2. 持続可能なコミュニティ形成の展望

本研究で提案した心理的および物理的安全性を基盤としたコミュニティ形成の手法は、今後の社会における持続可能なコミュニティの発展において重要な役割を果たす可能性がある。特に、経済的・社会的成功を過度に重視しないリスクと平等性を基盤とした関係性は、メンバー間の信頼を深め、支援を求めやすく、支援を提供しなくなる文化を自然に育む環境を作り出すことが期待される。

また、今後の展望としては、地域社会、職場、学校、オンラインコミュニティなど、多様な場面における適用をさらに拡大することが考えられる。これにより、孤立や分断を防ぎ、メンバーが互いに協力し、助け合う文化を形成することが可能となるだろう。さらに、技術の進展により、オンラインツールやプラットフォームを活用した新しい形のコミュニティ形成が期待されるが、これらにも本研究で提案した安全性と相互扶助の考え方が適用されるべきである。

最後に、持続可能なコミュニティを形成するためには、外部のリソースや他のコミュニティとの連携も重要となる。外部との協力を通じて、内部だけに閉じこもらないオープンなネットワークが形成され、持続可能性を高めることができる。これにより、コミュニティは単なる内部支援の場にとどまらず、より広い社会全体で相互扶助の基盤を築いていくことが可能となるだろう。

## 参考文献

- Edmondson, A. (1999). Psychological Safety and Learning Behavior in Work Teams. *Administrative Science Quarterly*.
- Newman, O. (1972). *Defensible Space: Crime Prevention*

through Urban Design.

- Sandel, M. J. (2020). *The Tyranny of Merit: What's Become of the Common Good?*
- Putnam, R. D. (2000). *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*.
- Bauman, Z. (2000). *Liquid Modernity*.